様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４４０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０７８２

研究課題名（和文）第２次大戦後・朝鮮人の渡日過程とその背景に関する歴史的研究

研究課題名（英文）The historical study on the process of the Korean visiting to Japan and its background after World War II

研究代表者
藤永　壮（FUJINAGA, TAKESHI）

大阪産業大学・人間環境学部・教授

研究者番号：００２４７８７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、まず血縁と地縁で結びついた在日朝鮮人のネットワークが、その渡航過程や日本での生活において果たした役割を究明するため、済州島のある村の住民たちの、解放直後から1970年代ごろまでの生活史を復元しようとした。その結果、とくに解放後の済州島側のプッシュ要因としては、済州4・3事件が重要であり、また多くは「密航」という形態で渡日していたことを指摘した。さらに朝鮮人の「密航」をめぐるインタビューの記録を韓国で刊行し、近現代史の中でのディアスポラとしての朝鮮民族の姿を描き出した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we restored life histories of villagers in Jeju Island from the liberation to the about 1970s, in order to research the role that the network of the Korean residing in Japan tied to blood relatives and shared territorial bondings carried out not only in their voyage processes to Japan but in their lives in Japan. As a result, Jeju 4.3 rebellion was important as the push factor in Jeju Island after the liberation in particular, and most islanders stowed away to Japan. On the other hand, we published a record of the interviews over the Korean stowaways and drew the figures of the Korean as the Diaspora in the modern history.

研究分野：朝鮮近現代史

キーワード：朝鮮　戦後　在日朝鮮人　密航　韓国　済州島　4・3事件

１．研究開始当初の背景

戦後の日本は、長期にわたって朝鮮人（韓国籍を含む）の渡航を厳しく制限していた。そのためさまざまな事情から日本への渡航を希望する朝鮮人は「密航」という形態で渡日せざるを得なかった。これまで「密航」の実態調査はほとんど不可能であったが、最近では「密航者」自身が自らの体験を率直に語りはじめている。

私たちはこれまで、在日済州島出身者に対するインタビュー調査を実施してきたが、そこでしばしば登場したのが、渡日過程における「密航」の問題であり、また「密航」によって制約された在日朝鮮人の生活の困難さであった。その証言内容は官憲資料からはうかがい知れない貴重な体験記録として、史料的価値が高い。

しかしかつての「密航者」はすでに相当の高齢に達しており、いま調査を実施しなければ、その体験は永遠に消え去ることになるため、緊急に証言を収集し記録にとどめておく必要があると考え、本研究の着想に至った。

２．研究の目的

戦後、朝鮮人の「密航」について、いまだ本格的な研究は現れていない。したがって本研究では「密航」に関する諸問題をできるだけ幅広く追究する。とくに、(1)日本・韓国政府による渡航管理政策の制度的変遷とその実態、(2)「密航」の背景、(3)「密航」の実態、(4)「密航」後の日本での生活状況、などの問題を中心に解明する。本研究では、これらの諸問題に関する基礎的な事実を確定していくとともに、学際的な共同研究の利点を活かし、独創的な研究成果を生み出すべく努めた。

３．研究の方法

本研究は、インタビュー調査、文献調査、フィールド調査などの方法を並行して進めた。インタビューは原則として録音、ビデオ撮影を行い、記録にとどめた。文献調査は日本・韓国の主要な資料館・図書館で実施した。またフィールド調査によって、日本国内および韓国で、「密航者」の足跡を確認した。本研究は歴史学・社会学・文化人類学の 3 分野の研究者による共同研究であり、それぞれの学問分野の特徴を活かすための研究組織が不可欠であった。そこで研究代表者・分担者を中心に調査チームを編成し、共同で調査にあたり、また随時、研究会を開催した。また韓国の研究機関・研究者などと積極的に研究交流を行った。

４．研究成果

(1) 本研究ではまず、済州島北部地方の済州市奉蓋洞に所在する東回泉マウルという村を対象として、その住民たちの日本への渡航、定着、往来などの経験を文責した。とくに本研究ではある家族（以下、X 氏家と称す）に着目することによって、個々人の渡日に至る背景、ネットワーク、移動時期などの重層的な関係を明らかにしようとした。

X 氏家の場合、3 姉妹の二女が大阪に定着していたことが、三女や長女の長男・二男・婿が日本を目指す大きな動機となっていた。しかしその二女にしても、渡日の際には、まず従姉の女性を頼り、次に身を寄せたのは最初の夫のいとこの家であった。そしてその後も二女の縁戚として、母方の従妹夫妻やその甥が日本に渡航している。3 姉妹の同世代やその子の世代から、少なからぬ縁戚が大阪に居住する X 氏家二女を頼みとして、日本に渡航しようとしたのである。しかもその多くは同郷であり、とくに二女の渡日の際には、同郷の友人 2 名が一緒に日本へ渡っている。血縁・地縁で結びついたネットワークの存在が、済州島民に渡日を促す重要な要因として機能していたことを確認できる。

こうした済州島民の渡日現象を検討するうえで、解放後の済州島側のプッシュ要因としては、まず済州 4・3 事件を挙げておかねばならないだろう。かつて私は別稿で、朝鮮半島が南北分断の危機を迎え、実際に分断国家が樹立された 1947～50 年の時期には、政治的迫害を避けようと、済州島民の渡日志向が強まったこと、とりわけ 1948 年 4 月 3 日に武装蜂起がはじまると、その傾向がより顕著になったことを指摘した。その後も済州島での生活に展望を見いだせなくなった若者たちは、自らの人生を切り開くため日本へ渡ろうとし、1970 年代に入っても日本へ向かう済州島民の流れが途絶えることはなかったのである[1)]。

X 氏家の場合でも、済州農業中学校の生徒だった長男、そして長女の夫、三女の最初の夫と二度目の夫の兄、さらには母方のいとこが 4・3 事件で死亡または行方不明となっている。これら多数の縁故者の死は、4・3 事件で済州島民が被った精神的・社会的・経済的打撃の象徴と言え、日本への渡航を促す直接・間接の要因となったことだろう。

さらに本稿で紹介した解放後の渡日の事例が、すべて「密航」という形態を取っていたことに、とくに留意しておかなければならない。解放直後の 1946 年 3 月に GHQ と日本政府は帰還朝鮮人の再渡日を認めない措置を取り、1951 年 11 月の出入国管理令施行によって韓国・朝鮮人に対する入国管理政策は制度化された。一方、韓国政府が韓国人の海外旅行を自由化したのは 1989 年のことである。したがって 1970 年代ごろまで、済州島民が日本に渡航しようと思えば、ほとんどすべてのケースで「密航」という手段に頼らざるを得なかったのである。日本に「不法滞在」している「密航者」たちの多くは当然、外国人登録の手続きを行うことができなかったため、つねに不安に怯えながら生活するほかなかった。血縁・地縁のネットワークをよりどころに済州島から密航してきた人びとのうち、「不法滞在」を密告されたり、人目を

忍んで暮らす生活の不便さに耐えきれなくなって自首し、済州島へ帰った者も多かったのである。済州島と日本との間に「合法」的な往来が困難であったという事情は、地縁・血縁ネットワークに制度的なくさびを打ち込み、もう一つの「離散家族」とも言える状況を済州島民の家族コミュニティにもたらしたと言えるだろう。

(2) また本研究期間中には、従来から実施してきたフィールド調査、インタビュー調査の蓄積を踏まえ、これに新たな調査結果をつけ加えることによって、朝鮮人の「密航」をめぐるインタビューの記録をまとめた『在日済州人の生活史 2―故郷の家族、北の家族―』（ソニン、2015 年）を韓国で公刊した。これは『在日済州人の生活史 1―安住の地を求めて―』（ソニン、2012 年）に続く私たちの共同研究の成果である。

本書には私たちが記録した 5 名のインタビューが収録されている。4・3 事件当時、南朝鮮労働党員として活動し、夫との死別後かろうじて渡日して日本に定着した李性好。4・3 事件で兄を失い、朝鮮戦争の時にはいったん入営して除隊した後、指名手配される直前に日本へ密航して来た夫熙錫。4・3 事件で兄と姉を失い渡日した後、北朝鮮への帰還事業で母らが帰国したため、家族が南と北と日本で散り散りに分かれて暮らすことになった姜京子。日本で生まれ、民族教育に献身したのち歴史研究者となり、4・24 阪神教育闘争に関する研究などを残した金慶海。4・3 事件体験後、日本への密航を 3 回も試みた金玉煥。これら 5 名のインタビュー記録の内容は、個人史であると同時に、植民地時代から解放後の混乱した時期を乗り越えてきた朝鮮現代史の流れと軌を一にしている。生きのびる場所を探して、済州から日本へ、また日本から北朝鮮へと渡らざるを得なかった当時の状況はディアスポラとしての朝鮮民族の姿を象徴するものと言えるだろう。

注 1) 拙稿「第二次大戦後における済州島民の日本への「密航」について」津波高志編『東アジアの間地方交流の過去と現在――済州と沖縄・奄美を中心にして――』（彩流社、2012 年）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 16 件）

① 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（15・下）―金慶海さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文･社会科学編、査読無、No. 25、2015、99-125

② 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（15・中）―金慶海さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文･社会科学編、査読無、No. 24、2015、163-190

③ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（15・上）―金慶海さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文･社会科学編、査読無、No. 23、2015、225-250

④ 高正子、猿橋順子、柳蓮淑、橋本みゆき、在日コリアン１世・２世女性のライフストーリに見る時間表現の談話機能―文化談話分析からの考察―、多文化関係学、査読有、Vol.12、2015、21-37

⑤ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（14・下）―金玉来さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文･社会科学編、査読無、No.22、2014、123-138

⑥ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、韓国・済州からの渡日史―東回泉マウルの事例から―、コリアン・スタディーズ、査読無、No.2、2014、117-131

⑦ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（14・上）―金玉来さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文･社会科学編、査読無、No.21、2014、55-74

⑧ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（13・下）―夫熙錫さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文･社会科学編、査読無、No.20、2014、31-55

⑨ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（13・上）―夫熙錫さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文･社会科学編、査読無、No.19、2013、151-177

⑩ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（12・下）―李性好さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文･社会科学編、査読無、No.18、2013、159-176

⑪ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、

高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（12・上）―李性好さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文・社会科学編、査読無、No.18、2013、139-157

⑫ 藤永壯、日韓国交樹立と在日朝鮮人の民族教育―外国人学校制度案を中心に―、環東海レビュー、査読有、Vol.9、No.1、2013、5-36（ハングル）、37-65（日本語）

⑬ 藤永壯、朝鮮学校補助金停止問題と植民地主義、歴史学研究、査読有、No.902、2013、16-24

⑭ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（11・下）―金玉煥さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文・社会科学編、査読無、No.16、2012、87-99

⑮ 藤永壯、植民地期・在日朝鮮人紡績女工の労働と生活―大阪在住の済州島出身者を中心に―、女性史学、査読有、No.22、2012、pp.16-32

⑯ 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、解放直後・在日済州島出身者の生活史調査（11・上）―金玉煥さんへのインタビュー記録―、大阪産業大学論集人文・社会科学編、査読無、No.15、2012、157-177

〔学会発表〕（計 23 件）

① 伊地知紀子、都市移住者のローカルなふるまい―在日済州島出身者の移動史を通して―、釜山大学校韓国民族文化研究所・大阪市立大学都市文化研究センター共催第 3 回学術大会、2016 年 02 月 20 日、釜山市（韓国）

② 伊地知紀子、19 世紀末以降の済州島から見た生活圏形成と変容―チャムス（海女）の移動と操業実態をとおして―、2015 東アジア海洋都市国際学術会議、2015 年 11 月 26 日、済州市（韓国）

③ 藤永壯、植民地公娼制度と日本軍「慰安婦」制度、東アジアにおける日本軍‘慰安婦’徴集研究国際学術会議、2015 年 10 月 26 日、城南市（韓国）

④ Ko, J., Saruhashi, J., Yu, Y. S. & Hashimoto, M.、Comparison of the language management strategies between first and second generation of Korean residents in Japan: Exploring Zainichi Korean cultural discourses、The 4th International Language Management Symposium、2015 年 09 月 27 日、上智大学（東京都千代田区）

⑤ 伊地知紀子、在日済州人の歴史と生活、東アジア共同体講座、2015 年 09 月 18 日、慶山市（韓国）

⑥ 伊地知紀子、日本人学者がみる在日済州人の生と文化、慶北大学校グローカル文化コンテンツ創意人材養成事業団、2015 年 09 月 17 日、大邱市（韓国）

⑦ 藤永壯、大島渚「朝鮮人」との邂逅―「忘れられた皇軍」、そしてその後―、青巌大学校在日コリアン研究所国際学術大会「在日コリアンに対する認識と言説」、2015 年 08 月 28 日、ソウル市（韓国）

⑧ 伊地知紀子、解放後済州島出身者渡日史の形成過程―在日済州島出身者の生活史調査を通して―、第 12 回コリア学国際学術大会、2015 年 08 月 21 日、ウィーン市（オーストリア）

⑨ 伊地知紀子、在日済州島出身者の生活史調査から日韓関係を考える、韓国近代学会、2015 年 5 月 9 日、大邱市（韓国）

⑩ 伊地知紀子、Le colonialisme et le racisme au Japon. Autour des Coréens Zainichi、Disqualification socio-spatiale dans les villes françaises et japonaises. Regards croisés entre l'histoire et la sociologie、2015 年 03 月 26 日、パリ市（フランス）

⑪ 藤永壯、韓国の過去清算について―真実和解委員会の活動を中心に―、「東中欧・ロシアにおける歴史と記憶の政治とその紛争」第 5 回研究会、2015 年 03 月 16 日、関西学院大学東京丸の内キャンパス（東京都千代田区）

⑫ 藤永壯、「慰安婦」動員の「流言」「造言」をめぐって、日韓歴史研究者ワークショップ「「流言飛語」の時代―戦時期朝鮮社会の実像を探る―」、2015 年 02 月 07 日、京都大学人文科学研究所（京都市）

⑬ 高正子、在日コリアンが奏でるソリ（音・声）「アリラン峠を越えてゆく―在日コリアン音楽の今―」の公演を事例に、東洋音楽学会定例会議、2014 年 11 月 02 日、国立民族学博物館（大阪府吹田市）

⑭ 伊地知紀子、在日済州人研究の課題と展望―「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査」の事例から―、第 5 回済州大学在日済州人センター国際学術会議「在日済州人の生活史と文化」、2014 年 09 月 18 日、済州市（韓国）

⑮ 高正子、海を越える家族ネットワーク―東回泉マウル李氏家族の事例を中心に―、第 5 回済州大学在日済州人センター国際学術会議「在日済州人の生活史と文化」、2014 年 09 月 18 日、済州市（韓国）

⑯ 伊地知紀子、Imperial Japan and the Migrant Female Divers of Jeju Island in South Korea、Association for Asian Studies (AAS) Annual Conference、2014 年 07 月 19 日、シンガポール

⑰ 藤永壯、大阪における民族教育運動の現在―大阪府・大阪市補助金問題を中心に―、青巌大学校在日コリアン研究所国際学術大会「在日コリアン運動と抵抗的

アイデンティティ」、2014年06月27日、順天市（韓国）

⑱ 伊地知紀子、The cooperation of labor of diving women in Jeju Island, South Korea-Cooperation for whom, and for what?、Inter-Congress IUAES、2014年05月17日、幕張メッセ（千葉市）

⑲ 高正子、ソン・ミギョン、大阪の在日コリアンと祝祭、在外韓人学会国際学術会議「コリアンタウンと祝祭、2014年3月26日、ソウル市（韓国）

⑳ 伊地知紀子、境界を渡る人びと：在日済州島出身者の生活史から、京都人類学会2月例会、2014年2月28日、京都大学（京都市）

21 藤永壯、「慰安婦」問題が映し出す現代日本の「朝鮮」認識、歴史学研究会・日本史研究会合同シンポジウム「「慰安婦」問題を／から考える」、2013年12月15日、明治大学駿河台キャンパス（東京都千代田区）

22 高正子、韓流と大阪コリアタウン、第1回世界韓流国際学術大会、2013年10月19日、ソウル市（韓国）

23 伊地知紀子、済州島民と解放、4・3、6・25―済州島で生きる人びとと闘うこと―、日本学術振興会日韓共同研究 JSPS「冷戦期日韓におけるアメリカの表象―情報宣伝政策と民衆の対米認識」2013年度第1回ワークショップ、2013年8月3日、ソウル市（韓国）

24 藤永壯、済州島民の渡日・在日体験と血縁・地縁ネットワーク―東回泉マウルの事例から―、青巌大学校在日コリアン研究所国際学術大会「在日コリアンの生活文化と変容」、2013年06月29日、大阪教育大学天王寺キャンパス（大阪市）

25 高正子、大阪に暮らす済州島出身者たちの生活文化の一考察―冠婚葬祭と食文化を中心に―、在外韓人学会2012年定例学術大会、2012年12月21日、ソウル市（韓国）

26 伊地知紀子、Social relationships and mutual aid practices in Jeju , Korea: Fragmentary examination of "common benefits" and "common debts"、Kyoto International Seminar 2012、2012年11月25日、京都大学芝蘭会館（京都市）

27 藤永壯、植民地期・在日朝鮮人人口構成の推移―大阪地域の動向を中心に―、青巌大学校在日コリアン研究所国際学術大会「在日コリアン・ディアスポラの形成と展開―移住と定住を中心に―」、2012年08月22日、順天市（韓国）

28 伊地知紀子、大阪と「故郷」と結ぶ在日済州島人の同郷ネットワーク、国際シンポジウム「近代東亜城市的社会群体與社会網絡」、2012年07月25日、台北市（台湾）

〔図書〕（計10件）

① 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、高村竜平、村上尚子、福本拓、高誠晩、ソニン、在日済州人の生活史2―故郷の家族、北の家族―2015、359

② 伊地知紀子、社会評論社、消されたマッコリ。―朝鮮・家醸酒（カヤンジュ）文化を今に受け継ぐ―、2015、183

③ IJICHI, Noriko, Atsufum KATO, and Ryoko SAKURADA eds、New York、*Rethinking Representations of Asian Women: Changes, Continuity, and Everyday Life*、2015、202

④ 藤永壯、長志珠絵、大門正克、宋連玉、金貴玉ほか14名、岩波書店、「慰安婦」問題を／から考える―軍事性暴力と日常世界―、2014、256

⑤ 藤永壯、木村健二、朴美娥、玄善允、金廣烈ほか10名、ソニン、在日コリアンの生活文化と変容、2014、388

⑥ 伊地知紀子、景仁文化社、日本人学者が見た済州人の生―生活世界の創造と実践―（韓国語）、2013、300

⑦ 藤永壯、鄭熙ソン、成周鉉、李信澈、金廣烈ほか7名、ソニン、在日コリアン・ディアスポラの形成―移住と定住を中心に―（韓国語）、2013、382

⑧ 藤永壯、伊地知紀子、尹龍澤、李昌益、津波高志ほか17名、チェジュエソリ（済州の声）、済州と沖縄―東アジア地域間の移動と交流―（韓国語）、2013、585

⑨ 藤永壯、松田利彦、陳姃湲ほか9名、思文閣出版、地域社会から見る帝国と植民地―朝鮮・台湾・満洲―、2013、843

⑩ 高正子、ソン・ミギョン、イム・ヨンサンほか11名、ブックコリア、コリアタウンと韓国文化、2012、426

６．研究組織

(1)研究代表者

藤永　壯（FUJINAGA, Takeshi）
大阪産業大学・人間環境学部・教授
研究者番号：００２４７８７６

(2)研究分担者

伊地知　紀子（IJICHI, Noriko）
大阪市立大学・文学研究科・教授
研究者番号：４０３３２８２９

高　正子（KO, Jeongja）
神戸大学・国際文化学部・講師
研究者番号：８０４４１４４８